

韓国の職場女性の主観的QOLに関する研究 —主観的well-beingと心理的well-beingを中心に—

張 昌 鎬* 尹 敎榮** 吳 東 根**

Korean Paid women's Subjective Quality of life:
Subjective quality of life and psychological quality of life.

Jang Chang ho, Youn Chang young, Oh Dong keun

1 はじめに

QOL(quality of life)に対する研究をしてきた社会科学分野の学者たちは共通して人間のwell-beingを高めることに関心があった。社会心理学者は社会的関係、集団行動などを、社会学者たちは社会正当性、社会運動、社会階層などを、医学は人間の正常的・病理的な構造と機能を研究することによって人間の幸福を増進させようとした。また、社会福祉分野ではその目的をクライアントのQOLに置き、様々な研究をしてきた。

このようにQOLに対する研究は社会科学の研究の成果から得られるが、もっと客観的にQOLを評価しようとする社会指標研究(social indicators research)からも多くの資料が蓄積されている。(Lee Myeong Sin,1997)。特に、1990年代に入って韓国でもQOLに関する関心が高まりつつある。これは韓国の経済的成長が実際に国家の構成員である個人が感じる生きがいの質を高めたかと言う反省のためでもある。

このような状況のなかで、社会指標研究と関連した重要な論議の一つは、社会的条件の水準を測定する時、客観的な水準だけを測定するか、または、主観的な水準も測定するかの問題である。QOLは、しばしば、生活の満足度で評価され、満足度は願望に対する達成度で測定される。しかし、注目されねばならないのは、クライアントの漠然とした願望は、価値観とは必ずしも一致しないこ

とである。願望は、現実の自己の生きがいを含めてこうありたいという主観的なものであり、価値観の場合は、自己は必ずしも主体的にその枠内には入っておらず、客観的に生きがいを考えた場合の基準も含まれる。また、価値観は個別的である反面、地域社会の固定的な観念や時流にそったムードに支配されやすい。現実には、クライアントの願望や価値観は、千差万別、かつ流動的である(日野原重明, 阿部志郎,1998)。すなわち、客観的に同一な社会条件に対しても、個人の主観的満足度がことなるという点からQOLの主観的測定が重要視されてきた(Campbell,1976)。したがって、QOLを客観的QOLと主観的QOLに分けて研究している(Lee Hun Gu, 1997; Jo Myeong Han, Cha Gyeong Ho,1998)。客観的QOLと言うのは、経済的、環境的、または、社会的な生きがいの状況がどうか、という意味で、これは経済学者や社会学者達が古くから関心を持った課題である。これに対して主観的生きがいの主張は、主観的well-being、または、幸福とも言えることでこれは一人の社会構成員に与えた生きがいの状況に対してどう考えているか、またはどのような経験をしたかを意味することである。すなわち、主観的well-beingというのは客観的な生きがいの状況に対して主観的評価である主観的満足度や肯定的・否定的な情緒経験の程度を言う。従って、主観的well-beingは高いという

Received June 30, 2001 *長崎ウエスレヤン短期大学 Department of Culture, Nagasaki Wesleyan Junior College, Isahaya, Nagasaki, Japan 854-0081

**成均館大学心理学科講師

のは全般的な生きがいに対する満足度が高く、否定的情緒を少なく、肯定的情緒を多く経験する状態であると定義づけられる。したがって、この主観的well-beingは次の三つの特徴を持つ。一、主観的well-beingは、主観的である。二、主観的well-beingは、生きがいの否定的要素がないことを意味することではなく、肯定的・積極的な側面を反映する。三、主観的well-beingは、生きがいの様々な要素や側面に対する全般的な評価を含めている。

主観的well-beingに対する研究で一番多く論議されていることは個人が感じる主観的well-beingの水準に差があるということである。社会学者たちは主観的well-beingの差を説明するため長い間努力した。初期の研究は年齢、性別、結婚、所得、政治への関心、教育水準などのような人口社会学的な変数が主観的well-beingの個人差を説明すると仮定した(Andrews & Withey, 1976; Bradburn, 1969; Campbell, et al., 1976)。しかし、最近の研究はこのような仮定に疑問を提示する。すなわち、年齢、性別、結婚、所得、政治への関心、教育水準などのような人口社会学的な変数が説明可能な主観的well-beingの変数を全部合算しても15%以下であるため(Diener, 1984, 1994; Myers & Diener, 1995; Ryff, 1989)、人口社会学的変数を持って主観的well-beingの個人差を説明するには限界があるということであること。従って、主観的well-beingに対する最近の多くの研究は主観的well-beingと個人の心理的特性との関連性を究明するために努力している。

例えば、性格(Emmons & Diener, 1986)、外向性と神経症(McCrae, 1980)、社交性(Emmons & Diener, 1986)、自己尊重感(Diener, 1995)、内的抑制力(Larson, 1989)、信仰心(Okun & Stock, 1987)、また個人が要求する目標の特性(Emmons, 1986)などの個人的特性と主観的well-beingとの関連性が過去30年間、広範囲に研究されてきた。これらの研究によると主観的well-beingの水準が高い人は、自己尊重感が高いし、自己または周りに対する統制力を持っていると考えられるし、楽観的であり外向的な性格を持っているし、信仰

心があり、周りの友達や親戚とより親密な関係を維持する人である(Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999; Myer & Diener, 1995)。

最近、Ryff(1989)は主観的well-beingの構造が生活満足度、肯定的情緒、否定的情緒としておこなわれているという主張に対する理論的根拠がないと批判しながらQOLが高いと言うことは、ただの幸福な生活をするだけの意味することではない、と提案している。

Ryff(1989)とRyff 及びKeyes(1995)は主観的well-beingよりは心理的well-beingがよりQOLを反映していると主張している。Ryff(1989)は良い生きがいに対する臨床、相談、さらに発達心理学からの様々な理論、すなわちMakslow(1968)の自我実現、Rogers(1961)の完全に機能する個人、Jung(1933)の個性化、Allport(1961)の成熟、Erikson(1959)の心理社会的発モデル等を基礎に、心理的well-beingは六つの要因から成り立つと言いながらこれを測定する尺度を開発した。この六つの要因というのは、自我受容、肯定的対人関係、自律性、環境に対する支配力、生きがいの目的、個人的成長である。それぞれの要因で高い点数と低い点数の意味は、〈付録1〉に提示している。これら心理学理論で言う良い生きがいというのは、肯定的対人関係を継続的に維持し、自分の行動を独立的、または自ら調節する能力があり、環境の選択や変化させる能力があり、生きがいの目的があり、自分の潜在力を実現させる動機がある生活である。このような心理的well-beingは、生きがいに対する主観的な評価ができる主観的well-beingとは異なり主観的well-beingに影響を与えられる心理的側面に対する主観的評価であると同じに、各個人の性格的特性である。

したがって、本研究では、主観的QOLを説明するために主観的well-beingと心理的well-being要因を究明し、それらの要因間の関連性を調べ、それらの要因が韓国の職場女性の人口統計的特性によって、どのような差があるかを明らかにする。

Ryff (1989; Ryff & Keyes, 1995)は、心理的well-beingの六つの要因が主観的well-beingの測定値と異なった関連性を見せ、特に年齢による変

化のパターンが異なるのを明らかにした。自我受容と環境支配力が、主観的well-beingと比較的強い相関関係を見せる反面、他の四つの要因は、弱い相関を見せた。また、環境支配力と自律性は、年齢が高ければ高いほど増加するが生きがいの目的と個人的成長は、年齢が高くなると減少を見せた。自我受容と肯定的対人関係は、年齢による変化がなかった。性別的には、女性が男性より肯定的要因で高い点数を見せた。このような結果は、心理的well-beingは六つの要因と関連性を見せるが、互いに独立した要因であることを意味する。すなわち、心理的well-beingの構造が六つの心理的要因から成り立っていることである。

また、主観的well-beingと関連がある要因やその関連度が分化(国家)によって異なることを見せる様々な研究がある(Diner&Diner,1995; Kwan, Bond, & Singles,1997; Oishi, Diner, Lucas, & Suh, 1999)。49カ国の大学生の生活満足度を調査したDiner(1995)は、自己尊重感(self-esteem)と生活満足度間の相関関係が、国家による差があることを見せている。すなわち、個人主義的性向が強い国家では自己尊重感と生活満足度間の相関が比較的強いが、集団主義的性向が強い国家では相関が比較的弱いように現れた。また、Oishi(1999)は、貧しい国家では経済的満足度が生活満足度と強い相関を見せる反面、豊かな国家では家庭の満足度が生活満足度と強い相関があることを発見した。また、彼らは集団主義的文化に比べに比べ個人主義的文化では、自尊感欲求(esteem need)に関連した満足、すなわち、自己(self)や自由(freedom)に対する満足感が生活満足度と強い相関を見せていると報告している。

このように、生活満足度に対する比較文化的研究は主観的well-beingに影響を与える要因、特に心理的要因が文化によって差があることを示している。

しかし、Ryff(1989)の心理的well-beingの六つの要因は、西洋文化特に個人的文化に基づいている。したがって、MarkusとKitayama(1991)は文化によって自分に対する理解、他人に対する理解差があり、このような差のために、個人は異なった認知的・情緒的経験すると提案している。集団

主義的文化圏である東洋文化圏では、他人に気を付けて個人間の相互依存性を重要視するが、個人主義文化圏である西洋文化圏では、自分自身に気を付けて自分の内的特性を表現することによって、独立性を維持することが重要である。すなわち、東洋文化圏では個人間の相互依存性が強調される反面、西洋文化圏では個人の独立性が強調される(Hofstede,1991 ; Triandis,1995)。したがって、このような個人主義文化に基づいている心理的側面が集団主義的文化圏である韓国にも主観的well-beingと関連性があるか、もし関連性があるとすればどの程度であるか、また、どのような心理的要因が一番関連性が強いかを検討することは大きな意味があると思われる。したがって、本研究では心理的well-beingを構成している三つの要因(生活満足度、正的情緒、負的情緒)の関連性を職場女性を対象に調べる。

II 調査方法

1. 調査対象者

この調査は様々な職業に従事している韓国の職場女性に、2000年11月2日に800枚を配付し2001年2月16日回収した。全部490の質問紙が回収され、その中で応答の内容が不備な20名の資料を除き、470名の資料を分析した。

調査対象者の年齢は、20代と30代が全体の80%以上を示している。未婚者が46.8%であり既婚者が53.2%であった。全ての調査対象者が高卒以上の学歴を持っていた。調査対象者に対する詳しい人口統計的特性は次の<表1>に提示している。

2. 調査道具

<主観的well-being>

主観的well-beingを測定するために生きがい満足度、正的情緒、負的情緒の三つの領域を測定した。

一、生活の満足度はDiener(1985)などによって開発された生きがいの満度尺度(The Satisfaction with Life Scale: SWLS)を利用した。生活満足度尺度は7点尺度(1点:全然そうでわない~7点:本当にそうである)として5個の項目に構成され

＜表1＞調査対象者の人口統計的特性

性 別	年 齢	結 婚	学 力	月 平 均 収 入
女470(100%)	20代235(50.0%) 30代147(31.3%) 40代73(15.5%) 50代以上15(3.2%)	未 婚 220(46.8%) 既婚250(53.2%)	中卒3(0.6%) 高卒107(22.8%) 大在42(9.0%) 大卒317(67.6%)	100未満 83(18.0%) 200未満 151(32.8%) 300未満 122(26.5%) 400未満 65(14.1%) 400以上 39(8.5%)

居 住 地	女 子 数	宗 教	職 業	在 職 期 間
ソウル201(42.8%)	0名 254(54.0%)	キリスト教129(31.7%)	公務員 114(24.5%)	1年未満 58(13.6%)
京畿道 75(16.0%)	1名 73(15.5%)	仏教 79(19.4%)	生産職 6(1.3%)	1～3年 114(26.7%)
忠清道 31(6.6%)	2名 122(26.0%)	カトリック 43(10.6%)	サービス職 20(4%)	3～5年 62(14.6%)
全羅道 2(0.4%)	3名 17(3.6%)	その他 2(0.5%)	販売職 16(3.7%)	5～10年 90(21.1%)
慶尙道124(26.4%)	4名以上 4(0.9%)	無し 154(37.8%)	事務職 151(32.4%)	10～15年 48(11.3%)
江源道 25(5.3%)			技術職 5(1.1%)	
その他 12(2.6%)			専門職 104(22.3%)	
			経営職 2(0.4%)	
			その他 48(10.3%)	

ている。SWLSは信頼性や妥当性のような重要な心理測定の要件を満足させていることを多くの研究で証明している(Pavot & Diener 1993)。

二、肯定的情緒と否定的情緒の測定の為に情緒頻度検査を1ヶ月間、肯定的情緒と否定的情緒を経験したかを7点尺度（1：全然ない～7：いつもそうである）に表示するようにした。肯定的情緒は愛情、満足感、楽しみ、自負心の四つの情緒を含めているし否定的情緒は恐怖、悲しみ、罪悪感、怒りの四つの情緒を含めている。それぞれ4個の情緒頻度の平均値を肯定的情緒頻度点数と否定的情緒頻度点数として使用した。

＜心理的well-being＞

心理的well-beingはRyff(1989)によって開発された心理的well-being尺度(Psychological Well-Being Scale; PWBS)を使用した。PWBSは六つの要因で、各要因別には14項目ずつ全体84個の項目になっている。六つの要因は自我受容、肯定的対人関係、自律性、環境に対する支配力、生きがいの目的、個人的成長である。各要因に対する定義は＜付録1＞に提示している。各項目は7点尺度に構成されている。Ryff(1989)は120項目に構成しているPWBSの六つの要因に対して0.86から0.93の信頼度係数を見せしているし、SchmutteとRyff(1997)は、84項目に構成しているPWBS

の六つの要因に対して0.82から0.89の信頼度係数を見せしている。本研究ではSchmutteとRyff(1997)の84項目を使用した。

Ⅲ 結果及び論議

1. 資料分析方法

まず、主観的well-beingと心理的well-beingの構成概念の妥当性と信頼度の分析を行った。そのために本研究で使った主観的well-beingの要因構造と心理的well-beingの要因構造に対する確認的要因分析を行った。心理的well-beingの場合、全体13項目に構成され、要因分析のための最低サンプル標本の大きさである要因数の10倍を十分に充足させているが、心理的well-beingの場合は全体84項目に構成されその基準を充足させなかった。このように標本の大きさのために要因分析の結果が安定していないために、心理的well-beingのそれぞれ要因別に探索的要因分析と信頼度分析を通じて7個の項目ずつ全体42項目を選んで最終要因分析に利用した。

主観的well-beingと心理的well-beingに対する確認的要因分析は、Lisrel8.0(Joreskog & Sorbom)を利用した。その他の分析はSAS6.12を利用した。確認的分析のためのモデルの測定変数は、個別項目を利用した。この場合、それぞれの

測定変数の正常分布を仮定しにくいと、媒介変数推定方式として各要因に加重値をあたえない非加重最小自乗法(Unweighted Least Square; ULS)を使用した。媒介推定方式にULS法を利用する場合にはカイ自乗と自由度を信用できないため、カイ自乗を利用しない符合度指数(Goodness of Fit Indices)であるGFI(基礎符合値)、AGFI(調整符合値)、NFI(標準符合値)を利用した。

2. 調査道具の妥当性及び信頼度分析

<主観的well-being>

主観的well-beingに対する確認的要因分析に利用した相関行列と分析プログラムは、<付録2>に提示しているがその結果は次の<表2>に提示している。<表2>のように要因構造に対する検証モデルの全般的符合次指数は一般的に良い符合値の基準として提示される.90をはるかに超える指数値を見せ、また<表3>に提示している標準化された要因係数で見ると生活満足が一番項目を除いた全ての項目に当たる要因に対してほとんど高い要因負荷量を見せている。従ってこのような結果を通じて主観的well-beingを構成している生活満足、肯定的情緒、否定的情緒の三つの構

<表2>主観的well-beingの要因構造モデルに対する符合指数

全般的符合指数	GFI	AGFI	NFI
符 合 値	.974	.962	.933

<表3>主観的well-beingの標準化した要因係数

問 項	Lisrel推定値			SMC
	要因 1 (生活満足)	要因 2 (肯定的情緒)	要因 3 (否定的情緒)	
E 1	0.292			0.085
E 2	0.492			0.242
E 3	0.587			0.345
E 4	0.388			0.151
E 5	0.441			0.194
F 3		0.529		0.279
F 6		0.806		0.650
F 7		0.691		0.477
F 8		0.835		0.697
F 1			0.616	0.380
F 2			0.710	0.504
F 4			0.601	0.361
F 5			0.374	0.140

成要素がお互いによく変別され、またこれらの構成要素の測定に利用した項目が妥当ということが分かる。

確認的要因分析を通じて構成概念間の変別妥当度が確認され、これらの構成要素間の関係をするため、相関分析を実施した。分析の結果は次の<表4>のように生活満足と肯定的情緒は、.431になり比較的高い相関をみせているが否定的情緒と生活満足間の相関及び否定的情緒と肯定的情緒間の相関は-.182と-.110になり比較的低い負的相関を見せている。このような結果は、高いQOLを持っている職場女性は正的情緒を多く経験する反面負的情緒は少なめに経験しているが負的情緒と他の二つの主観的well-beingの変数間の関連性がそれほど高くないことが分かる。

また、注目したい点は韓国の職場女性の生活満足の平均が3.816のすぎない点である。このような数字は7点尺度の中間水準である4点を基準にして見ると中間水準にも届かないことになり、肯定的情緒は4.424になり中間水準より高い、否定的情緒は2.965として比較的低い方と比べると相対的に生活満足度が低い水準であることが分かる。即ち韓国の職場女性は自分の生活に対して比較的満足していないことが分かる。

<表4>主観的well-beingの構成要素の平均と標準偏差及び相関関係

	平 均	標準偏差	生活満足の満足	肯定的情緒	否定的情緒
生活満足	3.816	0.980	(.543)		
肯定的情緒	4.424	1.045	.431***	(.796)	
否定的情緒	2.965	0.919	-.182***	-.110*	(.663)

*** P<.001, *P<.05

()は尺度の信頼度係数

<主観的well-being>

心理的well-beingに対する確認的要因分析に使用した相関行列と分析プログラムは<付録3>に提示している。その結果は次の<表5>のようである。<表5>のように要因構造に対する検証モデルの全般的な符合指数が一般的に良い符合指数として提示される.90をはるかに高い数値を見せし、また<表6>に提示した標準化された要因

係数で見るとように全ての項目に当たる要因に対して要因は高い要因負荷量を見せた。従ってこのような結果を通じ心理的well-beingを構成している自我受容、肯定的対人関係、自律性、環境支配、生きがいの目的、個人的成長の六つの構成要素が

＜表5＞心理的well-beingの要因構造モデルに対する適合指数

全般的適合指数	GFI	AGFI	NFI
符 合 値	.962	.957	.950

＜表6＞心理的well-beingの標準化した要因係数

問 項	Lisrel推定値						SMC
	要因1 (自我受容)	要因2 (肯定的関係)	要因3 (自律性)	要因4 (環境支配)	要因5 (生きがいの目的)	要因6 (個人的成長)	
A 1	0.470						0.221
A 2	0.318						0.101
A 3	0.439						0.193
A 6	0.589						0.347
A 8	0.706						0.499
A13	0.540						0.292
A14	0.432						0.186
SA 2		0.688					0.474
SA 5		0.529					0.280
SA 6		0.620					0.384
SA 7		0.606					0.367
SA 8		0.624					0.390
SA10		0.810					0.656
SA14		0.493					0.243
E 3			0.508				0.258
E 6			0.525				0.276
E 8			0.483				0.233
E 9			0.494				0.244
E12			0.639				0.408
E13			0.607				0.369
E14			0.638				0.407
PL 1				0.540			0.292
PL 4				0.697			0.486
PL 6				0.629			0.396
PL 7				0.671			0.450
PL 8				0.696			0.484
PL10				0.758			0.574
PL12				0.645			0.416
PG 7					0.588		0.346
PG 8					0.455		0.207
PG 9					0.387		0.150
PG10					0.584		0.341
PG11					0.539		0.290
PG13					0.622		0.387
PG14					0.661		0.437
PR 3						0.522	0.273
PR 5						0.623	0.388
PR 6						0.535	0.286
PR 7						0.760	0.577
PR11						0.713	0.509
PR12						0.691	0.477
PR14						0.661	0.437

互いによく変別され、またこれらの構成要素の測定に使用した項目が妥当であることが分かる。

心理的well-beingの構成概念間の相関を知るために構成要素間の相関を分析した。次の〈表7〉のように構成要素間の相関は.241から.720の比較的高い相関になり、全ての変数の $\alpha = .001$ 水準で有意である。特に肯定的対人関係と自律性間の関係が比較的低い相関 ($r = .214$) を見せ、自律的な人々の独立的、決断的な特性が他人との暖かく、満足的な関係維持と関連性が低いためと解釈できる。これと反対に自己受容、自律性と生きがいの目的、環境支配と生きがいの目的、個人成長と生きがいの目的などの関係が約 $r = .70$ の相関が現れた。変因の平均を見ると韓国の職場女性の心理的well-being水準が普通以上の水準であるが相対的に自分の生きがいに対する自律性を低く自覚していることである。

〈主観的well-beingと心理的well-beingの関連性〉

主観的well-beingと心理的well-being間の関連性を知るために各要因間の相関分析を実施しその結果は〈表8〉のようである。〈表8〉で見るよう

に主観的well-beingの生きがいの満足と肯定的情緒要因は心理的well-beingの全ての要因と正的関連性がある反面主観的well-beingの否定的情緒要因は心理的well-beingの全ての要因と負的な関連性があることが分かる。特に心理的well-beingの要因の中に自己受容が主観的well-beingの全ての要因と一番関連性が高いのである。このような結果は自分に対する肯定的な態度を持ち、自分のさまざまな側面を受容し認定し自分の生きがいに対して肯定的な視覚で見る人たちが自分の生きがいに対してより満足であり、肯定的情緒を多く感じるし否定的情緒は少なく感じる傾向があると解釈できる。

〈人口統計的特性による主観的及び心理的well-beingの差異分析〉

本研究で測定した人口統計的変数別に韓国の職場女性の主観的well-beingと心理的well-beingの差があるかを知るために集団平均間の差異検証を実施し、全般的F検証結果有意な差がある要因に対して、事後検証を実施しその結果をつぎの〈表9〉に提示している。

〈表7〉主観的well-beingの構成要素の平均と標準偏差及び相関関係

	平均	標準偏差	自己受容	肯定的関係	自律性	環境の支配	生きがいの目的	個人の成長
自己受容	4.644	0.889	(.700)					
肯定的関係	4.942	1.004	0.500	(.810)				
自律性	4.152	0.818	0.413	0.241	(.749)			
環境の支配	4.676	0.824	0.706	0.589	0.430	(.834)		
生きがいの目的	4.862	0.969	0.691	0.488	0.438	0.700	(.745)	
個人の成長	4.725	0.848	0.614	0.504	0.375	0.606	0.720	(.829)

全ての相関は、 $\alpha = .001$ 水準で有意
()は尺度の信頼度係数

〈表8〉主観的well-beingと心理的well-being間の相関関係

主観的well-being	心理的well-being					
	自己受容	肯定的関係	自律性	環境の支配	生きがいの質	個人成長
生活満足	.540	.237	.298	.432	.421	.315
肯定的情緒	.490	.277	.220	.441	.435	.348
否定的情緒	-.316	-.299	-.276	-.314	-.196	-.203

<表9>

	生活満足	肯定的 情 緒	否定的 情 緒	自己受用	肯定的 関 係	自律性	環境支配	生きがいの 目的	個人成長
全体	3.82(1.08)	4.38(1.04)	2.96(0.93)	4.64(0.90)	4.95(1.00)	4.14(0.81)	4.67(0.82)	4.86(0.97)	4.71(0.83)
結婚									
未婚	3.67(1.10) ^b	4.31(1.05)	3.11(0.88) ^a	4.54(0.86) ^b	4.94(0.95)	4.01(0.81) ^b	4.53(0.75) ^b	4.73(0.95) ^b	4.83(0.80)
既婚	3.94(1.06) ^a	4.43(1.03)	2.84(0.95) ^b	4.71(0.92) ^a	4.96(1.04)	4.24(0.79) ^a	4.79(0.86) ^b	4.96(0.98) ^a	4.63(0.85)
学力									
中卒	3.25(2.25)	3.42(1.28) ^b	3.08(0.88)	3.95(0.79) ^b	4.19(0.73)	4.00(0.43)	4.29(0.38)	4.48(0.95)	4.05(0.58)
高卒	3.67(0.99)	4.20(1.00) ^{ab}	3.00(0.86)	4.38(0.91) ^{ab}	4.86(1.06)	4.12(0.82)	4.55(0.84)	4.52(0.89)	4.46(0.81)
大在	4.01(1.25)	4.19(1.02) ^{ab}	3.39(1.32)	4.41(0.72) ^{ab}	5.04(1.11)	4.06(0.76)	4.48(0.65)	4.82(1.00)	4.84(0.83)
大卒	3.85(1.07)	4.47(1.04) ^a	2.90(0.89)	4.77(0.89) ^a	4.98(0.96)	4.15(0.82)	4.75(0.83)	4.99(0.97)	4.79(0.82)
収入									
100未満	3.99(1.05) ^b	4.25(1.02)	3.14(0.99)	4.39(0.73) ^c	4.76(1.06)	4.02(0.75) ^b	4.49(0.70) ^b	4.74(0.93) ^{ab}	4.66(0.84)
200未満	3.63(1.00) ^{ab}	4.42(1.07)	3.09(0.92)	4.59(0.82) ^{bc}	4.96(0.92)	4.70(0.76) ^b	4.62(0.80) ^{ab}	4.68(0.93) ^b	4.73(0.76)
300未満	3.76(1.11) ^{ab}	4.31(1.00)	2.81(0.93)	4.70(1.03) ^{ab}	5.02(1.12)	4.14(0.85) ^b	4.76(0.87) ^{ab}	5.01(1.04) ^{ab}	4.72(0.89)
400未満	4.01(1.15) ^a	4.41(0.96)	2.86(0.72)	4.77(0.91) ^{ab}	5.01(0.90)	4.23(0.81) ^{ab}	4.72(0.88) ^{ab}	4.91(0.90) ^{ab}	4.64(0.85)
400以上	4.12(1.14) ^a	4.61(1.18)	2.73(1.09)	4.95(0.98) ^a	5.00(0.98)	4.49(0.95) ^a	4.94(0.85) ^a	5.26(0.95) ^a	4.87(0.92)
子女数									
0名	3.73(1.06)	4.41(1.06)	3.03(0.88)	4.59(0.87)	4.92(0.94)	4.03(0.81)	4.55(0.77)	4.75(0.95)	4.82(0.82)
1名	3.78(0.84)	4.36(1.04)	2.83(0.92)	4.69(0.80)	4.97(0.92)	4.33(0.73)	4.78(0.82)	5.00(0.88)	4.63(0.74)
2名	4.00(1.17)	4.33(0.98)	2.96(1.06)	4.68(1.00)	4.96(1.08)	4.19(0.80)	4.83(0.91)	4.92(1.00)	4.51(0.83)
3名	3.98(1.33)	4.25(1.14)	2.59(0.74)	4.83(1.00)	5.17(1.46)	4.35(1.04)	4.71(0.77)	5.25(1.18)	5.11(1.09)
4名以上	3.81(1.68)	5.06(1.20)	2.94(0.59)	4.57(0.90)	5.04(1.12)	4.21(0.60)	4.71(0.71)	5.18(1.20)	4.93(0.44)
宗教									
基督教	3.94(1.01)	4.34(0.98)	2.98(0.92)	4.70(0.85)	5.13(0.92)	4.26(0.79) ^a	4.75(0.77)	5.06(0.92)	4.87(0.81)
佛教	3.69(0.99)	4.42(1.04)	2.95(0.89)	4.60(0.99)	4.88(1.02)	4.08(0.79) ^a	4.62(0.92)	4.77(1.00)	4.71(0.84)
天主教	3.82(1.19)	4.44(0.88)	3.05(1.00)	4.70(0.83)	4.85(0.81)	4.05(0.73) ^a	3.93(0.91)	4.29(1.01)	4.64(0.51)
その他	4.75(0.71)	4.63(1.24)	2.88(0.18)	4.93(1.52)	4.86(1.21)	3.29(0.40) ^b	3.93(0.91)	4.29(1.01)	4.64(0.51)
無宗教	3.78(1.15)	4.37(1.12)	2.93(0.96)	4.58(0.91)	4.87(1.08)	4.10(0.85) ^a	4.65(0.87)	4.72(0.99)	4.60(0.87)
年齢									
20代	3.78(1.05) ^a	4.48(1.03) ^a	3.05(0.90)	4.64(0.82) ^a	5.05(0.95) ^a	3.99(0.75)	4.59(0.72) ^{ab}	4.88(0.98) ^a	4.87(0.82) ^a
30代	3.85(1.02) ^a	4.34(1.01) ^a	2.92(0.93)	4.66(0.94) ^a	4.93(1.05) ^a	4.24(0.87)	4.70(0.88) ^a	4.79(0.93) ^a	4.62(0.78) ^a
40代	4.00(1.23) ^a	4.30(1.06) ^{ab}	2.79(0.97)	4.68(1.00) ^a	4.85(0.96) ^a	4.39(0.83)	4.93(0.87) ^a	5.06(0.98) ^a	4.54(0.90) ^{ab}
50代以上	3.25(1.17) ^b	3.79(1.10) ^b	2.88(1.12)	4.24(1.05) ^b	4.25(1.16) ^b	4.09(0.63)	4.36(1.13) ^b	4.33(0.89) ^b	4.22(0.67) ^b

全体的に主観的well-beingと心理的well-beingに一番多く影響を与えるのは女性の結婚の有無、年齢、収入、学歴などであり、宗教と子どもの数はほとんど影響を与えないように表われた。既婚者の場合には未婚者に比べ生活満足、自己受容、自律性、環境支配、生きがいの目的などに高い点数を見せ、反対に否定的情緒にはより低い点数が表われ全般的に未婚の女性と比べ既婚の女性が主観的well-being及び心理的well-beingは高いようである。また収入の面でも収入が高い人は収入が低い人に比べ相対的に生活満足、自己受容、自律性、環境支配、生きがいの目的で高い点数を見せ収入が高い人が収入が低い人に比べ主観的well-beingと心理的well-beingが高いようである。集団平均間の差異検証では統計的に有意な結果は表われなかったが、他の要因にもこのような傾向性があった。学歴の側面では学歴が高い人が学歴が低い人に比べ正的情緒自己受容に高い点数を見せたが、高卒以上の学歴の場合には差がなかった。年齢的側面では50代未満の人々が50代以上の人に比べ負的情緒自立性を除いた全ての要因に高い点数を見せ50代未満の人が50代以上の人に比べ主観的well-beingと心理的well-beingが高いのである。しかし、統計的には有意な差はなかったが否定的情緒の側面では若い女性がより多い否定的情緒を経験するように表われた。しかし、本研究の調査対象が主に20代～40代までの年齢を対象にしたため、年齢によるQOLに対するより正確な比較のためには調査対象を50代または60代まで拡大しなければならない。

2. 論議

東洋文化にも主観的well-beingと心理的well-beingの尺度の構成概念の妥当性があることが明らかになった。また相関分析の結果からも主観的well-beingと心理的well-beingが互いに区別される概念であることが明らかになった。このような結果はDienier(1984;1994)の研究で生きがいの満足度、肯定的情緒、否定的情緒、の3つの構成概念とRyffとKeyes(1995)が主張する心理的well-beingの6つの次元の1つである上位の要因として受

けられる自我受容、肯定的対人関係、自律性、環境に対する支配力、生きがいの目的、個人的成長の6つの構成概念が互いに独立的な要因であることを意味する西洋の研究と一致した。したがって韓国でも主観的well-beingと心理的well-beingに対する構成概念が区別されることが確認されるようになった。

本研究からも主観的well-beingが自己受容及び環境支配との関連性が高く表われ特にRyff(1989)とRyff及びKeyes(1995)の研究とは異なり生きがいの目的また生きがいの満足度及び肯定的情緒と高い関連性があった。本研究の結果によると韓国の職場情勢の中で未婚女性より既婚女性の主観的well-being及び心理的well-beingが高く表われ、Ryff(1989)とRyff及びKeyes(1995)の研究と同じように生きがいの目的と個人成長は年齢が高くなればなるほど減少するように表われ、環境支配力と自律性は年齢による差がない。

また、宗教と主観的・心理的well-being間の関連性が低く韓国の職場女性のQOLが宗教による影響がないことが分かる。これは、信仰心が主観的well-beingに影響を及ぼすというOkunとStock(1987)の研究とは相違する結果であった。これは測定上の問題かもしれないが、しかし1年に1回程度お寺に行く人々も仏教信者であると答える韓国の事情を考えると欧米のキリスト教の信仰と韓国の仏教との信仰との信仰心の差であると推論される。

また、韓国の経済的状況と関連して収入が主観的well-beingと心理的well-beingとの関連性が高いように表われ生活満足度、自己受容、自律性、環境支配、生きがいの目的は収入が高ければ高いほど高くなり韓国の職場女性の主観的well-being及び心理的well-beingに大きい影響を与える事がわかる。これは、Oishi(1999)の研究のように貧しい国家では経済的満足度と生きがいの満足度と強い相関があるという結果と一致し、主観的well-being及び心理的well-being経済的側面がある収入と関係があることが分かる。

一方、韓国の職場女性の主観的well-beingと心理的well-beingが中間程度の水準であり、これに

対する社会的QOLの向上戦略が要求される。

本研究の対象が仕事している女性だけを対処にしたため韓国全体の女性と特に男女全てに一般化させるには限界がある。したがって、男女全てを研究対象にしながら職場以外の女性にも研究を拡大する必要がある。

＜参考文献＞

Kim Jae Eun, Lee Eun Sun, Kang Sun Wha (1997), 『韓国大学生の生きがいの満足度』, ソウル: 集文堂.

Son Sung Young, Park Suk Ja, Jeun Bang Ji, Jo Sun Keung, Hoang Seuk Man(1999), 『女性の仕事と生きがいの質』, ソウル: 未来の人力研究センター.

Lee Meung Sin(1997), 「勤労者の主観的生きがいの質とその影響要因」, 延世大学博士学位論文.

李勳求(1997), 『幸福の心理学』, ソウル: 法文社.

Jo Meung Hoan, Kim Jung Ho, Kuon Suk Man(1994), 『青少年の生きがいの質』, 社会科学政策研究, 第16巻, 第2号, pp. 61-94.

Jo Meung Hoan, Cha Keung Ho(1998), 『生きがいの質に対する国家間の比較』, ソウル: 集文堂.

Cha Keung Ho(1995), 「韓国,日本及びアメリカ大学生の生きがいの質比較」, 韓国心理学会春季シンポジウム, 『生きがいの質の心理学』, pp115-143.

Cha Keung Ho(1999), 「大学生の主観的well-beingと個人中心主義-集団中心主義の性向の関係-」, 韓国青少年研究, 第10巻, 第2号, pp. 193-216.

Cha Keung Ho(1999), 「大学生の主観的well-beingと心理的well-beingの関係」, 社会科学研究, 湖西大学社会科学研究所, pp. 575-595.

Hong Suk Gi(1994), 『仕事と愛の心理学』, ソウル: Nanam出版.

日野原重明, 阿部志郎(1998), 『医療と福祉-QOLのために-』, 小林出版, pp. 196-197.

Allport, G. W. (1961). Pattern and growth in personality. New York: Holt, Tinehart &

winston.

Andrews, F. M., & Withey, S. B. (1976). Social Indicators of Well-Being: America's Perception of Life Quality. New York: Plenum.

Bradburn, N. M. (1969). The structure of psychological well-being. Chicago: Aldine.

Buhler, C. (1935). The curve of life as studied in biographies. Journal of Applied Psychology, 19, 405-409.

Campbell, A. (1976). Subjective measures of well-being. American Psychologist, 31, 117-124.

Campbell, A., Converse, P. E., & Rodgers, W. L. (1976). The Quality of American Life. New York: Russell Sage Foundation.

Christopher, J. C. (1999). Situating psychological well-being: Exploring the cultural roots of its theory and research. Journal of Counseling & Development, 77, 141-151.

Costa, P. T., Jr., & McCrae, R. (1980). Influence of extroversion and neutroticism on subjective well-being: Happy and unhappy people. Journal of Personality and Social Psychology, 38, 668-678.

Diener, E. (1984). Subjective well-being. Psychological Bulletin, 95, 542-575.

Diener, E. (1994). Assessing subjective well-being: Progress and opportunities. Social Indicators Research, 31, 103-157.

Diener, E., & Diener, M.(1995). Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. Journal of Personality Assessment, 49, 71-75.

Diener, E., Suh, E., Smith, H. & Shao, L. (1995). National difference in reported subjective well-being: Why do they occur?, Social Indicator Research, 34, 7-32.

Diener, E., Suh, E., Lucas, R., & Smith, H. (1999). Subjective well-being: Three decades

- of progress, *psychological Bulletin*, 125, 276-302.
- Emmons, R. A. (1986). Personal strivings: An approach to personality and subjective well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1058-1068.
- Emmons, R. A., & Diener, E. (1986). Influence of impulsivity and sociability on positive and negative affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1211-1215.
- Hofstede, G. (1991). *Cultures and organizations: Software of the mind*.
- Jung, C. G. (1933). *Modern man in search of a soul* (W. S. Dell & C. F. Baynes, Trans.). New York: Harcourt, Brace, & World.
- Kwan, V. S. Y., Bond, M. H. & Singelis, T. M. (1997). Pancultural explanations for life satisfaction: Adding relationship harmony to self-esteem. *Journal of Personality and Social psychology*, 73, 1038-1051.
- Larson, R. (1989). Is feeling 'in control' related to happiness in daily life? *Psychological Reports*, 64, 775-784.
- Markus, H. & Kitayama, S. (1991). culture and self: Implications for cognition, emotion, and motivation, *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Maslow, A. W. (1968). *Toward a psychology of being* (2nd ed). New York: Van Nostrand.
- Michalos, A. C. (1991). *Global report on student well-being*. New York: Springer-Verlag.
- Myers, D. G., & Diener, E. (1995). Who is happy? *Psychological Science*, 6, 10-19.
- Neugarten, B. L. (1973). Personality change in late life: A developmental perspective. In C. Eisdorfer and M. P. Lawton(Eds.), *The psychology of adult development and again* (311-355). Washington. DC: American Psychological Association.
- Oishi, S., Diener, E. F., Lucas, R. E., & Suh, E. M. (1999). *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 980-990.
- Okun, M. A., & Stock, W. A. (1987). Correlates and components of subjective well-being among the elderly. *Journal of Applied Gerontology*, 6, 95-112.
- Pavot, W., & Diener, E. (1993). Review of the satisfaction with life scale. *Psychological Assessment*, 5, 164-172.
- Rogers, C. R. (1961). *On becoming a person*. Boston: Houghton Mifflin.
- Ryff, C. D. (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1069-1081.
- Ryff, C. D., & Keyes, C. L. M. (1995). The structure of psychological well-being revisited. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 719-727.
- Schmutte, P. S., & Ryff, D. C. (1997). Personality and well-being: What is the connection? *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 549-559.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press.
- Weiten, W., & Lloyd, M. A. (1997). *Psychology applied to modern life: Adjustment in the 90s*(5th ed.). Pacific Grove, CA: Brooks/Cole Publishing Company.

<付録1>心理的well-beingの6つの次元(Ryff, 1989, p.1072)

次 元	点 数	定 義
自 我 受 容 (self-acceptance)	高 い 点 数	自分に対する肯定的な態度を持っている；自分に良い点はもちろん悪い点も含めた自分の様々な側面を認知し受容する；自分の過去の生きがいに対して肯定的に感じる。
	低 い 点 数	自分に対して不満足；自分の過去の生きがいに対して失望する；自分が持っている悪い点に対して苦しむ；現在の自分とは異なった他人になろうとする。
肯定的対人関係 (positive relation with others)	高 い 点 数	他人と満足で温かい信頼関係を持てる；他人の幸福に関心がある；強い愛情、親密感、共感を感じることが可能；対人関係と言うのはgive and takeであることが理解できる。
	低 い 点 数	他人と親密な信頼関係をほとんど持ってない；他人に対して温かくないし、開放的でもないし、他人の配慮することが難しいと感じる、対人関係から孤立され挫折感を感じる、他人との重要な関係を維持するための妥協をしようとししない。
自 律 性 (autonomy)	高 い 点 数	決断力があり独立的である；特定な方式で考えながら行動するようにしている社会的圧力に抵抗できる；自分の行動を内的動機によって調節する；個人的基準によって自分を評価する。
	低 い 点 数	他人の評価や期待に対して気にする；重要な決定をする時他人の判断に依存する；特定な方式で考え行動をするようにしている社会的圧力を認める。
環境に対する支配力 (environmental mastery)	高 い 点 数	自分の環境をよく管理する能力があると感じる；複雑な外的活動計画をよく調整する；周りにある機会を効果的に利用する；個人的必要や価値にあう環境の選択や適切な環境として変化させることが可能。
	低 い 点 数	日常的なことをするにも困難を感じる；周りの環境を変化させることや向上させることが不可能と感じる；周りにある機会を認識しない。外部世界に関する統制力が足りないと感じる。
生きがいの目的 (purpose in life)	高 い 点 数	生きがいの目標と方向に対する感覚を持っている；過去と現在の生活が意味あると感じる；なぜ生きるかに対する回答を提供する信念を持っている；生活に目標と目的がある。
	低 い 点 数	生きがいの意味が足りないと感じる生きがいの目標や方向感覚がほとんどない；生活に意味をつける信念や態度を持っていない。
個 人 的 成 (personal growth)	高 い 点 数	継続的に発達していると感じる；自分が成長し発展していると感じる；自分の潜在能力を実現しようとする；時間がたつにつれ自分と自分の行動が向上されると感じる；自分自身をよく理解し活用する方向に変化する。
	低 い 点 数	個人的にい落ちこんでいると感じる；時間による成長や発展を感じない；生活が楽しくないと感じる；新しい態度や行動に発展させることができないと感じる。

<付録2>主観的well-beingに対する確認的要因分析プログラム

DATA NO=437 NI=13 MA=KM

LABEL

E 1 E 2 E 3 E 4 E 5 F 3 F 6 F 7 F 8 F 1 F 2 F 4 F 5

KM SY

1.000

0.113 1.000

0.227 0.193 1.000

0.001 0.509 0.131 1.000

0.171 0.130 0.374 0.056 1.000

0.104 0.165 0.165 0.036 0.139 1.000

0.099 0.193 0.218 0.121 0.187 0.373 1.000

0.102 0.162 0.185 0.066 0.130 0.459 0.576 1.000

0.129 0.215 0.20 0.180 0.179 0.409 0.701 0.530 1.000

-0.182 -0.203 -0.214 -0.148 -0.136 -0.0090 -0.117 -0.098 -0.098 1.000

-0.054 -0.160 -0.216 -0.152 -0.157 -0.053 -0.150 -0.127 -0.142 0.412 1.000

-0.093 -0.065 -0.227 -0.180 -0.190 -0.051 -0.073 -0.061 -0.069 -0.352 -0.452 1.000

-0.067 -0.136 -0.071 -0.129 -0.117 0.008 -0.030 0.053 -0.009 0.214 0.307 0.224 1.000

SELECT

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13/

MODEL NX=13 NK=3 LX=FU,FI TD=DI,FR PH=SY,FR

LK

LIFE_SAT POSI_AFF NEGA_AFF

FREE LX 2 1 LX 3 1 LX 4 1 LX 5 1

FREE LX 7 2 LX 8 2 LX 9 2

FREE LX 11 3 LX 12 3 LX 13 3

VALUE 1.0 LX 1 1 LX 6 2 LX 10 3

PATH DIAGRAM

OUT IT=100 ADD=OFF ND=3 ss ME=ULS

<付録3>心理的well-beingに対する確認的要因分析プログラム

DATA NO=339 NI=42 MA=KM

LABEL

A 1	A 2	A 3	A 6	A 8	A13	A14	SA 2	SA 5	SA 6	SA 7	SA 8	SA10	SA14				
E 3	E 6	E 8	E 9	E12	E13	E14	PL 1	PL 4	PL 6	PL 7	PL 8	PL10	PL12				
PG 7	PG 8	PG 9	PG10	PG11	PG13	PG14	PR 3	PR 5	PR 6	PR 7	PR11	PR12	PR14				
KM SY																	
1.000																	
0.257	1.000																
0.227	0.296	1.000															
0.465	0.133	0.218	1.000														
0.238	0.279	0.321	0.190	1.000													
0.304	0.247	0.215	0.248	0.373	1.000												
0.198	0.277	0.488	0.188	0.292	0.179	1.000											
0.322	0.196	0.216	0.319	0.356	0.286	0.134	1.000										
0.146	0.059	0.139	0.191	0.223	0.129	0.118	0.367	1.000									
0.073	0.043	0.145	0.154	0.291	0.137	0.176	0.395	0.390	1.000								
0.151	0.107	0.212	0.217	0.288	0.187	0.140	0.276	0.415	0.407	1.000							
0.128	0.101	0.178	0.157	0.375	0.155	0.131	0.429	0.432	0.428	0.421	1.000						
0.180	0.088	0.229	0.239	0.373	0.272	0.234	0.540	0.404	0.502	0.477	0.535	1.000					
0.062	0.158	0.190	0.203	0.174	0.137	0.277	0.277	0.268	0.337	0.213	0.357	0.340	1.000				
0.147	0.084	0.136	0.217	0.200	0.105	0.134	0.316	0.338	0.300	0.258	0.330	0.456	0.220	1.000			
0.248	0.249	0.209	0.213	0.322	0.262	0.211	0.349	0.242	0.240	0.240	0.326	0.326	0.158	0.381	1.000		
0.100	0.186	0.214	0.083	0.426	0.202	0.233	0.284	0.221	0.301	0.345	0.359	0.362	0.165	0.293	0.247	1.000	
0.085	0.063	0.082	0.267	0.082	0.017	0.100	0.241	0.256	0.241	0.306	0.140	0.294	0.224	0.188	0.226	0.168	1.000
0.175	0.144	0.124	0.210	0.256	0.189	0.169	0.489	0.399	0.373	0.404	0.381	0.498	0.285	0.420	0.326	0.325	0.267
1.000																	
0.104	0.107	0.168	0.255	0.185	0.126	0.246	0.320	0.237	0.384	0.251	0.264	0.414	0.404	0.346	0.362	0.297	0.431
0.330	1.000																
0.181	0.155	0.102	0.155	0.302	0.307	0.152	0.402	0.246	0.292	0.380	0.455	0.494	0.347	0.275	0.278	0.310	0.307
0.399	0.336	1.000															
0.160	0.039	0.041	0.276	0.177	0.184	0.059	0.349	0.200	0.282	0.205	0.203	0.324	0.165	0.237	0.288	0.120	0.247
0.264	0.311	0.231	1.00														
0.242	0.142	0.175	0.277	0.367	0.321	0.215	0.475	0.297	0.487	0.283	0.405	0.511	0.295	0.336	0.316	0.259	0.187
0.354	0.390	0.409	0.408	1.000													
0.183	0.097	0.107	0.255	0.275	0.267	0.126	0.404	0.264	0.280	0.242	0.224	0.392	0.217	0.328	0.415	0.280	0.235
0.283	0.373	0.320	0.473	0.433	1.000												
0.261	0.113	0.184	0.273	0.347	0.262	0.135	0.437	0.255	0.351	0.318	0.367	0.441	0.241	0.391	0.515	0.341	0.207
0.421	0.347	0.406	0.314	0.454	0.506	1.000											
0.183	0.042	0.103	0.294	0.313	0.294	0.073	0.422	0.305	0.323	0.367	0.349	0.509	0.185	0.254	0.352	0.280	0.226
0.373	0.290	0.388	0.439	0.501	0.523	0.472	1.000										
0.177	0.098	0.141	0.327	0.335	0.302	0.147	0.436	0.325	0.345	0.360	0.361	0.535	0.297	0.279	0.325	0.294	0.306
0.366	0.403	0.387	0.471	0.556	0.527	0.443	0.687	1.000									
0.238	0.129	0.162	0.201	0.322	0.218	0.187	0.384	0.407	0.370	0.472	0.517	0.535	0.416	0.343	0.321	0.313	0.245
0.442	0.349	0.523	0.215	0.390	0.308	0.382	0.338	0.349	1.000								
0.124	0.049	0.142	0.222	0.243	0.193	0.076	0.360	0.268	0.353	0.332	0.271	0.432	0.186	0.239	0.264	0.240	0.202
0.302	0.255	0.293	0.309	0.352	0.360	0.386	0.486	0.509	0.240	1.000							
0.153	-0.042	0.056	0.165	0.216	0.177	0.158	0.206	0.140	0.225	0.176	0.130	0.227	0.190	0.075	0.134	0.211	0.163
0.169	0.253	0.215	0.339	0.249	0.380	0.359	0.342	0.427	0.148	0.263	1.000						
0.070	-0.003	0.071	0.193	0.137	0.086	0.093	0.153	0.122	0.239	0.138	0.137	0.226	0.190	0.078	0.055	0.108	0.200

韓国の職場女性の主観的QOLに関する研究

0.218	0.261	0.178	0.327	0.241	0.273	0.126	0.255	0.320	0.149	0.198	0.435	1.000						
0.173	0.056	0.172	0.236	0.373	0.267	0.128	0.365	0.220	0.297	0.325	0.332	0.446	0.194	0.195	0.250	0.265	0.202	
0.326	0.243	0.327	0.352	0.402	0.264	0.310	0.411	0.475	0.255	0.399	0.255	0.197	1.000					
0.145	0.046	0.098	0.284	0.229	0.120	0.041	0.314	0.219	0.284	0.259	0.288	0.311	0.178	0.296	0.193	0.313	0.247	
0.266	0.277	0.257	0.226	0.339	0.388	0.384	0.476	0.214	0.401	0.313	0.244	0.296	1.000					
0.144	0.043	0.139	0.201	0.271	0.213	0.113	0.432	0.279	0.260	0.324	0.298	0.500	0.218	0.256	0.180	0.273	0.244	
0.404	0.301	0.390	0.284	0.381	0.297	0.350	0.400	0.437	0.312	0.406	0.272	0.168	0.377	0.278	1.000			
0.208	0.136	0.157	0.205	0.415	0.305	0.230	0.363	0.325	0.309	0.430	0.427	0.471	0.290	0.256	0.308	0.254	0.284	
0.420	0.288	0.531	0.175	0.401	0.297	0.375	0.393	0.398	0.475	0.321	0.201	0.173	0.415	0.224	0.513	1.000		
0.055	0.049	0.133	0.166	0.046	0.030	0.111	0.178	0.097	0.222	0.173	0.152	0.232	0.252	0.208	0.177	0.073	0.382	
0.208	0.305	0.171	0.248	0.152	0.168	0.151	0.148	0.195	0.169	0.161	0.117	0.172	0.117	0.175	0.146	0.109	1.000	
0.083	0.008	0.067	0.175	0.085	0.068	0.081	0.230	0.123	0.251	0.216	0.200	0.342	0.303	0.180	0.106	0.176	0.422	
0.294	0.327	0.342	0.229	0.217	0.205	0.243	0.219	0.247	0.254	0.175	0.207	0.224	0.169	0.230	0.253	0.241	0.484	
1.000																		
0.078	0.067	0.077	0.107	0.101	0.002	0.155	0.167	0.121	0.285	0.216	0.146	0.235	0.244	0.078	0.142	0.149	0.424	
0.180	0.324	0.307	0.158	0.199	0.109	0.134	0.183	0.203	0.233	0.168	0.145	0.161	0.122	0.196	0.210	0.211	0.470	
0.439	1.000																	
0.133	0.121	0.163	0.276	0.186	0.153	0.058	0.302	0.297	0.319	0.484	0.282	0.401	0.187	0.314	0.271	0.223	0.344	
0.358	0.386	0.332	0.335	0.302	0.256	0.287	0.349	0.342	0.350	0.367	0.233	0.237	0.285	0.263	0.384	0.374	0.392	
0.377	0.339	1.000																
0.128	0.087	0.116	0.277	0.142	0.132	0.154	0.246	0.163	0.293	0.219	0.164	0.302	0.291	0.215	0.261	0.193	0.458	
0.344	0.405	0.304	0.360	0.309	0.390	0.264	0.249	0.362	0.274	0.217	0.320	0.322	0.251	0.268	0.286	0.264	0.375	
0.442	0.403	0.427	1.000															
0.057	0.110	0.147	0.186	0.204	0.102	0.150	0.238	0.164	0.230	0.197	0.214	0.323	0.296	0.221	0.256	0.205	0.496	
0.306	0.396	0.272	0.299	0.263	0.230	0.230	0.251	0.297	0.358	0.170	0.213	0.236	0.225	0.182	0.322	0.338	0.431	
0.450	0.439	0.436	0.483	1.000														
0.180	0.074	0.095	0.243	0.132	0.139	0.079	0.254	0.196	0.228	0.236	0.181	0.328	0.172	0.189	0.205	0.173	0.369	
0.293	0.295	0.307	0.292	0.225	0.286	0.270	0.275	0.317	0.227	0.244	0.263	0.235	0.247	0.287	0.308	0.300	0.386	
0.433	0.325	0.459	0.451	0.458	1.000													

SELECT

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42/

MODEL NX=42 NK=6 LX=FU,FI TD=DI,FR PH=SY,FR

LK

SELF_AC POS_REL AUTONO ENV_MAS PUR_LIF PER_GRO

FREE LX 2 1 LX 3 1 LX 4 1 LX 5 1 LX 6 1 LX 7 1

FREE LX 9 2 LX 10 2 LX 11 2 LX 12 2 LX 13 2 LX 14 2

FREE LX 16 3 LX 17 3 LX 18 3 LX 19 3 LX 20 3 LX 21 3

FREE LX 23 4 LX 24 4 LX 25 4 LX 26 4 LX 27 4 LX 28 4

FREE LX 30 5 LX 31 5 LX 32 5 LX 33 5 LX 34 5 LX 35 5

FREE LX 37 6 LX 38 6 LX 39 6 LX 40 6 LX 41 6 LX 42 6

VALUE 1.0 LX 1 1 LX 8 2 LX 15 3 LX 22 4 LX 29 5 LX 36 6

PATH DIAGRAM

OUT IT=100 ADD=OFF ND=3 SS ME=ULS